

創設から15年の節目

南山大学人間関係研究センターは2000年4月1日に設立されたので、2015年4月からは15年目に入ります。前身の南山短期大学人間関係研究センターが設立されたのは1977年ですので、本センターもその前身から数えて38年の歴史を有していることになります。

1977年の日本は高度経済成長の真っ盛り、日本経済も右肩上がり、作れば売れる時代でした。世界情勢も経済もある程度安定し、「こうすれば業績が上がる」「これを続ければ将来はさらに生活が豊かになる」という正解が存在していて、過去の経験を活かすことができる状況でした。この大量生産の時代は、上位者や経験者、専門家からの指示に従って行動することが業績を上げることにつながりました。指示する－指示される、教える－学ぶ、という、二分化された関係性のうでで効果性や学習が高まった時代といえます。

本センターが設立された2000年は、バブル経済崩壊後の「失われた10年」と呼ばれる時代でした。それから現在に至るまで、環境がめまぐるしく変化し、グローバルな競争が激しくなり、テロによる悲惨な事件が続くなど、予測不能な状況です。ある1つの正解が存在する訳ではなく、過去の経験や前例をそのまま適用してもうまくいかないことが多い時代です。このような環境の中では、立ち現れる今の状況に対して、過去の経験や学習、外在する正解やツールなどの専門性に頼るのではなく、みんなで創造的に考え、対話し、実行し、学習していくことが必要になってきます。このような形、すなわち、メンバーが参加し、関わり、対話し、そこで生まれてくる体験から学ぶという関わりは、当センターが大切にしている「Tグループ」というグループアプローチが重視してきたものと共通しています。

人々が参加し、対話し、ともに学び、ともに行動することが大切とされる時代だからこそ、その器となるグループの場も重要になってきます。本紀要のテーマは「グループの可能性と広がり」であり、グループアプローチに関する特集を組みました。特集では、異なるグループアプローチ間の対話が行われた自主企画の逐語録の他、さまざまなグループに関する論文が掲載されています。本号に対してご寄稿いただきました諸先生に、この場を借りて御礼申し上げます。本号がグループアプローチ研究の推進に貢献し、さらなる実践や研究が今後広がっていくことを願っています。

「グループの可能性と広がり」に関する本センターの今後のミッションは、「人間性豊かな社会をつくり出すために」を実現するべく、本センターが培ってきた、Tグループを代表とするグループでの対話と学習をさらに現場で応用していくことだと考えています。このような時代だからこそ、みんなで考えて決め、実行するという民主的な風土づくりを通して、グループやチーム、組織が強くなり、学び豊かになっていくことに向けた現場の支援や、その研究の実施、トレーニングの実施などにさらに取り組んでいきます。